火あかくかゝげて、かたきのさいをこひせめて、とみにもいれねば、どうをばんのうへにたてゝ、まつ、

〔枕草子九〕みじかくてありぬべき物

とうだい

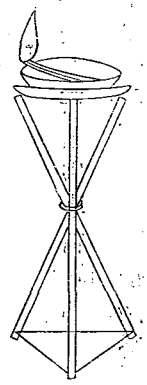
〔玉海〕文治三年二月九日辛巳、此日内府〔藤原通〕○略始有作交事、○中諸大夫持參切燈臺、立内府座上、

〔鹿苑院殿御元服記〕御祝儀式次第〔足利義滿元服、中略〕○應安元年四月朔日、

掌燈二執燭役無之、切灯臺、高一尺五寸、白文松鶴、

〔普廣院殿御元服記〕一正長二年三月九日、乙卯、亥刻、御元服、〔足利義教、中略〕○切燈臺、高一尺五寸、白紋松鶴、高燈臺八本、白文同、金物皆白、

〔貞丈雜記八調度〕一むすび燈臺の事、是は禁中にて公事、○略註を行る、時、其司の座の前にとぼす燈臺也、細く丸く削りたる木を、立鼓の如く立て、其上にかはらけを置て油を入れ、火をともす也、繪圖左の如し、



麻縄太サ三ツ分リ是程也

結燈臺寸法、柱の長サ二尺五寸五分、小口丸ノ經上ニテ四分、下ニテ六分、又ハ上ニテ四分半、下ニテ六分半ニモスル也、足ノ開一尺八寸程ヅヽ也、